

JLSR / JAPAN LIFE STORY RESEARCH INSTITUTE

日本ライフストーリー研究会

WG 企画 特別研究会 参加案内



THEME

テーマ

調査者と調査協力者の対話から 読み解く多声性

WG メンバー：WG メンバー：永井翔（リーダー）、池上賢、池田佳代、打保由佳、大川裕司、岡本優加子、河野義貴、佐藤正則、大谷明子

■ 開催概要

開催形態	ライフストーリー研究所会場 + オンライン（ハイブリッド形式）
開催時間	6月28日（日）13:00～16:30（計3時間30分） / Zoom会場は別途案内
主な内容	導入解説、事例報告4件、質疑応答、少人数討議、全体共有
参加対象	大学生、大学院生、研究者、実務家など、ライフストーリー研究やインタビュー調査に関心のある方
参加経験	インタビュー経験の有無は問いません。初学者の参加も歓迎します。

■ 演者一覧

発表順	演者	演題
第1発表	池上 賢	調査協力者からの指摘——インタビューとその後の相互行為に見る多声性への気づき

発表順	演者	演題
第2発表	池田 佳代	共創の現場で紡がれるデジタル・ストーリーの多声性
第3発表	岡本 優加子	シク教徒虐殺遺族の語りにおける多声性と共生の在り方
第4発表	打保 由佳	多声が結集する調査協力者の生活への調査者による参加と介入-介助関係を聞き取るうえでの対話的リアリティの問題について-

■ 企画の趣旨

ライフストーリー研究では、インタビューで語られる経験や出来事を通して、個人の生の歩みと社会との関係を読み解きます。本研究会では、その「語り」を単なるデータとして扱うのではなく、調査者と調査協力者の対話のなかでどのように生み出され、どのように理解されていくのかに注目します。

キーワードとなる「多声性」とは、一つの語りの中に、語り手自身の経験だけでなく、家族、学校、職場、地域、制度、時代背景、そして調査者の問いかけなど、複数の視点や文脈が折り重なって現れることを指します。難しい理論用語としてではなく、インタビューの現場で実際に起きていることを捕えるための手がかりとして考えていただくと理解しやすくなります。

本研究会では、発表事例と討議を通じて、「語りをどう聞くか」「何を根拠に解釈するか」「調査者の立場や問いがどこまで語りを形づくるか」といった論点を、分野横断的に検討します。専門知識の共有だけでなく、これから質的研究に取り組む方にとっても、調査の見方を広げる機会となることを目指します。

■ このような方に適しています

大学生・大学院生

インタビュー研究の基本的な見方や、質疑・討議で考える着眼点をつかむことができます。

研究者	調査者の立場性や、語りの解釈の幅を見直すヒントを得ることができます。
実務家・他分野の参加者	社会学、言語学、心理学、教育学、福祉学、看護学など領域は問いません。対話が重視される場면을研究と実践の両面から考えることができます。

■ 参加前に意識すると理解しやすい点

- 発表内容そのものだけでなく、どのような問いかけや関係性のなかで語りが生まれているのかに注目すると、議論の焦点がつかみやすくなります。
- 調査協力者の語りをただちに一義的に解釈するのではなく、「別の読み方はいくつか」という視点を持つと、多声性の論点が見えやすくなります。
- 後半の討議では、「自分が調査者ならどのように聞くか、どこに難しさや可能性を感じるか」を考えながら聞いておくと参加しやすくなります。

■ 当日プログラム

時刻	所要	内容	担当
13:00 – 13:05	5分	開会挨拶	永井 翔
13:05 – 13:10	5分	趣旨説明	永井 翔
13:10 – 13:20	10分	導入解説『調査者と調査協力者の関係性から読み解く多声性』	永井 翔
13:20 – 13:40	20分	第1発表 (20分)	池上 賢
13:40 – 13:50	10分	第1発表 質疑応答	会場・オンライン参加者 ／ 進行：永井 翔
13:50 – 14:10	20分	第2発表 (20分)	池田 佳代

時刻	所要	内容	担当
14:10 – 14:20	10 分	第 2 発表 質疑応答	会場・オンライン参加者 ／ 進行：永井 翔
14:20 – 14:30	10 分	休憩・接続調整	全員
14:30 – 14:50	20 分	第 3 発表 (20 分)	岡本 優加子
14:50 – 15:00	10 分	第 3 発表 質疑応答	会場・オンライン参加者 ／ 進行：永井 翔
15:00 – 15:20	20 分	第 4 発表 (20 分)	打保 由佳
15:20 – 15:30	10 分	第 4 発表 質疑応答	会場・オンライン参加者 ／ 進行：永井 翔
15:30 – 16:00	30 分	ブレイクアウトセッション	全員 / 総合司会： 永井 翔
16:00 – 16:30	30 分	各グループの報告・全体共有	各グループ代表 / 進行：永井 翔

注 1 14:20 – 14:30 は休憩と接続調整の時間です。

注 2 「まとめ」は、16:00 - 16:30 の全体共有の終盤で総括として扱う予定です。

■ 各演者 30 分セッションの標準構成

時間配分	進め方	担当	ねらい
0:00 – 0:20	発表	各演者	内容や方法は各演者に委ねます。
0:20 – 0:28	質疑応答	参加者 → 各演者	質問は 1 名あたり 2、3 分程度を目安とし、論点を簡潔に共有します。

時間配分	進め方	担当	ねらい
0:28 – 0:30	次発表への接続	進行・次演者	交代、準備、接続確認の時間とします。

補足 発表時間と質疑時間の細かな配分は、演者の進め方に応じて前後します。

■ ブレイクアウトセッションと全体共有

ブレイクアウトでは、数名ずつの小グループに分かれて討議を行い、最後に各グループから 1 名が全体共有を担当します。研究経験の差にかかわらず、「自分ならどう聞くか・どう解釈するか」を持ち寄ることが中心です。

討議テーマは「自分がインタビューを行うとしたら、どのような方法にしようと考えたか」です。自分の研究テーマや関心に引きつけてお話してください。方法論の正解を一つに定める場ではなく、視点の違いを持ち寄る場として位置づけています。

■ 討議を深めるための問いの例 (話題に困る場合、参考程度に活用ください)

問い 1	どのような質問や応答が、語りを広げたり方向づけたりしていたように見えるか。
問い 2	調査者と調査協力者の距離の取り方は、語りの内容や語りやすさにどう影響しているか。
問い 3	どの場面に、語り手以外の「声」や社会的文脈が重なっているように見えるか。
問い 4	その語りを研究上の根拠として扱うとき、どこに可能性があり、どこに慎重さが必要か。

PRESENTERS & ABSTRACTS

演者抄録

ABSTRACT
No. 1**演者** 池上 賢 (いけがみ さとる)

拓殖大学政経学部准教授

演題 調査協力者からの指摘——インタビューとその後の相互行為に見る多声性への気づき

抄録

本報告では、発表者が調査後に協力者から受けた指摘から、ライフストーリーインタビューの場における多声性について考える。

筆者は、戦後日本社会におけるマンガをはじめとしたポピュラーカルチャーに関する経験を明らかにするため、機縁法を用いた調査を行ってきた。現在は第2次となる調査を進めているが、友人に協力を依頼し調査を行った際に、調査の進め方や筆者の質問の仕方など、改善すべき点について指摘を受けた。そして、その際に気づかされたのは、筆者自身がいかに「構え」を持って調査に臨んでおり、それにより会話の展開する可能性を閉ざしてしまっていたのかという反省点であった。

以上の点を踏まえて、今回の報告では、座談会形式で行ったライフストーリーインタビューのデータと、その後にインターネット上で交わされた会話を事例として考察したい。どうすれば（限界はありつつも）インタビューの場における多声性を析出することが出来るのか、あるいは協力者から受けた指摘をどのように活かしていくべきか、これらの点について議論することが報告の目的となる。

ABSTRACT
No. 2**演者** 池田 佳代 (いけだ かよ)

法政大学キャリアデザイン学部兼任講師

演題 共創の現場で紡がれるデジタル・ストーリーの多声性

抄録

先住民族の共同体のために活動する者たちが創作した数分の動画群は、自己物語であると同時にコミュニティの生活世界が映し出されている。それは、参加者各人から示されたストーリーのアイデアについてコメントを出し合う過程を経てストーリーが完成されていく、デジタルストーリーテリング（DST）という方法で創作されたことによる。では、そのようにして完成した動画（デジタル・ストーリー）にはどのような多声性が表れているのだろうか。本発表では、ニカラグアの先住民女性たちの創作の現場を検討する。

ABSTRACT

No. 3

演者 岡本 優加子（おかもと ゆかこ）

演題 シク教徒虐殺遺族の語りにおける多声性と共生の在り方

抄録

1984年のインド・デリーで発生したシク教徒虐殺事件の後、被害者遺族らが集住するティラク・ヴィハール地区では、主に政治・宗教的エリート層によって「シク共同体」としての統一的な記憶継承が試みられてきた。だが、住民へのインタビューや参与観察では、エリートの想定する被害者像からこぼれ落ちる人々や、出身カースト・地域による複雑な線引きが見られ、ときにそれらは矛盾をはらむ「揺れ動く語り」としても表出した。本報告では、調査者という存在が、一人の語り手の中に潜在する「複数の声」をいかに呼び起こし、インタビューの場を多声的空間へと変容させたかについて分析し、それらの声がせめぎあう多声的空間における共生の在り方について検討を試みる。

ABSTRACT

No. 4

演者 打保 由佳（うつぼ ゆか）

中部学院大学人間福祉学部 准教授

演題 多声が結集する調査協力者の生活への調査者による参加と介入—
介助関係を聞き取るうえでの対話的リアリティの問題について—

抄録

今回の報告では、調査協力者である障害者のKさんとその介助者との関係の形成過程をテーマにKさんにインタビューを行い、その後、Kさんに介助者の紹介を依頼したものの断られたという場面を取り上げる。

インタビューにおける対話は、調査協力者と調査者の二者関係以上の意味が含まれ、調査協力者のライフにかかわる人びとやその人びととの関係性など複合的な文脈のリアリティで成り立つ「対話的リアリティ」（桜井 2025）が浮き彫りになる。そこで、上述の場面をもとに、調査者が、インタビューを通して調査協力者の生活空間に踏み込むことから生じる問題、調査協力者のこれまで形成してきた人間関係に割って入ってしまう可能性について検討する。